

Letter for Members

【コンテンツ】

- 受賞者の声 107
—平成 24 年度学会優秀論文賞
—第 122 回学術大会デンツプライ賞
- 支部学術大会報告 112
- International College of Prosthodontists
第15回学術大会参加報告 114
- Indian Prosthodontic Society
第41回学術大会参加報告 115

平成24年度学会優秀論文賞 受賞者の声

平成 24 年度 学会論文賞



田中卓男 (鹿児島大)

Twelve-year results of a direct-bonded partial prosthesis in a patient with advanced periodontitis: a clinical report.
J Prosthet Dent 2012; 108(2): 69-73.

日本補綴歯科学会学会論文賞を頂き、大変光栄に存じます。私は北海道大学卒業以来 40 年間に渡って、補綴領域において使用される接着技術の開発を研究テーマとしてきました。その長い年月において多くの師や同僚に恵まれたことが何よりの幸運であり、今回の受賞に繋がった最大の理由であると思います。

研究を始めた 1970 年代初頭は、リテンションビーズに代表される機械的結合技術が全盛の時代で、補綴領域で使用可能な接着技術は皆無といって良い状況でした。その後、接着技術を進歩させるエポックメイキングな出来事が次々に起こります。大変幸運なことに、なぜか私はそれらの現場のほとんどの居合わせることになりました。1980 年代初頭にメリーランドブリッジが日本に紹介された時に始まり、世界で初めての歯科用接着材として 4-META レジンが開発された時、接

着ブリッジが考案されて臨床応用が始まった時、貴金属接着用チオン系プライマーの臨床導入が開始された時などです。また、認可される場に携わったわけではありませんが、接着ブリッジが健康保険適用となったことも感慨深い出来事です。

Journal of Prosthetic Dentistry に掲載された受賞論文は、接着ブリッジの長期術後成績を通して、日本の歯科用接着技術の水準の高さを世界に紹介したものです。世界に先駆けて実用化された日本の接着技術は、現在でも欧米の追従を許さないものです。これからもさらに発展して補綴治療の進歩に寄与することを祈念しております。



平成 24 年度 中堅優秀論文賞



小峰 太 (日本大)

Durability of bond between an indirect composite veneering material and zirconium dioxide ceramics
Acta Odontol Scand 2013; 71(3-4): 457-463.

このたび、平成 24 年度 (社) 日本補綴歯科学会

中堅優秀論文賞の受賞者に選出していただきましたことを、誠に光栄に存じております。

近年の歯科用 CAD/CAM の進歩により、酸化ジルコニウム (ジルコニア) セラミックスによる臼歯部オールセラミック修復が可能となりました。ジルコニア修復物は陶材焼付鑄造冠と比較して、臼歯部において比較的高い確率での前装陶材のチッピングが報告されています。ジルコニアフレームワーク上に歯冠形態を前装する材料として、陶材あるいは間接修復用コンポジットレジンが考えられますが、これまでに、ジルコニアと間接修復用コンポジットレジンとの接着強さについて明らかにされていません。そこで本研究では、フレームワークであるジルコニアに対する表面処理が、ジルコニアと間接修復用コンポジットレジンとの長期接着強さに及ぼす影響を明らかにすることを目的としました。その結果、疎水性リン酸エステル MDP を含むプライマーでのジルコニア表面処理により、ジルコニアと間接修復用コンポジット間の安定した長期接着強さが確認されました。今後も、間接修復用コンポジット前装ジルコニア修復物に関する様々なデータを蓄積し、臨床応用における情報を提示できるよう進めていく所存です。

最後に、本研究を行うにあたり、終始ご懇篤なるご指導ならびにご高閲を賜りました本学部補綴学第Ⅲ講座の松村英雄教授に深甚なる感謝の意を捧げますとともに、研究にご協力いただいた当講座の先生方に心より厚く御礼申し上げます。



◆ ◆ ◆
本釜 聖子 (徳島大)

MI sensor-aided screening system for assessing swallowing dysfunction: Application to the repetitive saliva-swallowing test. J Prosthodont Res 2012; 56(1): 53-57.

このたびは、平成 24 年度日本補綴歯科学会中堅優秀論文賞を頂き、大変光栄に存じます。

近年、日本では高齢化が進み、摂食・嚥下リハビリテーションを有する患者のリハビリテーションへの関心が高まっています。摂食・嚥下障害は、機能障害や能力障害の有無や程度について“その障害をどのように評価するか”が非常に重要であるにもかかわらず、客観的で、簡便なスクリーニング方法が確立されていないのが現状です。

そこで、われわれは、反復唾液嚥下テスト (RSST) に代表されるように、嚥下によっておこる甲状軟骨の動きに着目し、磁石と磁気センサ (微小磁場変化を測定できる磁気インピーダンス効果に基づく MI センサ) を用いて、嚥下運動を簡単に記録・分析できる装置を開発し、その装置から得られた波形がどのように嚥下運動を反映しているのかを検討してきました。

本論文では、磁石と MI センサを使った装置の装着方法について、従来の RSST との比較、また、VE と VF と同期記録し、装置の妥当性について検証しています。今後、さらなる研究を進めることにより、摂食・嚥下に関する多職種の人達の相互理解を容易にし、その障害の管理・治療に携わる医療の一助になればと思っております。

最後に本研究の機会を与えて下さった市川哲雄教授、数多くのご指導を頂きました永尾寛准教授をはじめ、研究遂行にあたりご協力、ご助言をいただきました諸先生方に厚く御礼申し上げます。

◆ ◆ ◆
**平成 24 年度
特定推進研究優秀論文賞**



河野高志 (九州大)

The effect of low-magnitude, high-frequency vibration stimuli on the bone healing of rat incisor extraction socket. J Biomech Eng 2012; 134(9): 091001-1~091001-6.

この度は、平成 24 年度社団法人日本補綴歯科学会特定推進研究優秀論文賞に選出していただき大変光栄に存じます。

近年インプラント治療は欠損補綴における主要な選択肢として確立していますが、一般的には術後の免荷期間等を要する上、抜歯や骨移植後の治癒期間など治療が長期におよぶ点が大きな欠点となっています。骨組織は機械的刺激に対する感受性が高く、増負荷によって骨形成が促進され、逆に減負荷によって吸収されることが知られています。中でも微小な振動刺激による適度なメカニカルストレスは骨組織の治癒促進が期待でき、本研究ではそのひとつである高周波・低振幅の振動刺激 (Low-Magnitude High-Frequency vibration: LMHF 振動刺激) に着目しました。

本研究では LMHF 振動刺激の顎骨，中でも抜歯窩への効果を確認することを目的とし，ラットの下顎前歯を抜去した後，抜歯窩へ LMHF 振動刺激を与え，抜歯窩の治癒状態を観察しました。その結果，骨量には差が見られなかったものの有意に太い骨梁構造の形成が見られ，LMHF 振動刺激が密度の高い骨を形成することで抜歯窩の治癒を促進することが示唆されました。今後は臨床応用を見据えた動物実験やメカニズムの解明を目指した培養実験を進めていきたいと考えております。

最後に，本研究の機会を与えてくださいました古野潔教授をはじめ，数多くのご指導を頂きました鮎川保則講師，研究遂行にあたりご協力，ご助言を頂きました諸先生方に厚く御礼申し上げます。

◆ ◆ ◆
平成 24 年度
奨励論文賞



小正 聡 (大歯大)

Bioactivity of nanostructure on titanium surface modified by chemical processing at room temperature.

J Prosthodont Res 2012; 56(3): 170-177.

このたびは，平成 24 年度社団法人日本補綴歯科学会奨励論文賞を受賞させて頂き大変光栄に存じます。

近年，インプラント体の表面性状について種々の検索がなされ，インプラント体の表面性状が細胞接着・硬組織への分化誘導に影響を与え，それが埋入後の初期安定性を獲得するための期間短縮に関係することがわかっています。

そこで本研究では，純チタン金属を 10M の水酸化ナトリウム水溶液に室温で 24 時間浸漬することで，純チタン金属表面にナノレベルのネットワーク構造であるナノシート構造 (TNS) が析出されることを利用し，In vitro レベルでの評価を行ったところ，TNS 構造はラットの大腿骨より抽出した骨髄間葉系細胞の初期接着能および ALP 活性，オステオカルシン析出量，カルシウム析出量および Runx2 mRNA の発現が無処理の純チタン金属表面と比べて統計学的に有意に高い値を示すことが明らかにしました。

これは，従来のインプラントと比べてオッセオイン

テグレーション期間を短縮させることを示唆させるという優れた成果であり，純チタン金属を室温で水酸化ナトリウム水溶液に 24 時間浸漬するという比較的容易な方法からも臨床応用が大いに期待できる構造といえます。今後は in vivo レベルでの評価等更なる解析を行い，臨床応用に向けて努めていく所存です。

最後に，本研究の機会を与えてくださった川添堯彬理事長・学長，田中昌博教授，岡崎定司教授をはじめ，数多くのご指導をいただきました田口洋一郎先生，西田尚敬先生，関野徹先生，研究遂行にあたりご協力，ご助言を頂きました諸先生方に厚く御礼申し上げます。



後藤 崇晴 (徳島大)

Main occluding area in partially edentulous patients: Changes before and after implant treatment. J Oral Rehabil 2012; 39(9): 677-683.

この度は，平成 24 年度社団法人日本補綴歯科学会奨励論文賞を受賞させて頂き，大変光栄に存じます。

咀嚼は食物を粉碎し食塊を形成するという顎口腔系が営む重要な機能の一つです。その中でも咀嚼の第一ストロークに着目すると，ヒトはある一定の部位において食物の粉碎を行っていることが報告されています。この部位は「主機能部位」と呼ばれており，加藤均先生によって提唱された概念であります。今回の研究論文では，この主機能部位とインプラントによる補綴治療に着目し，欠損歯列における主機能部位の有無およびインプラント治療前後でのその変化を検討しました。その結果，欠損歯列においても主機能部位は存在し，その位置の変化に関して，インプラント治療前では欠損様式によって位置が異なっていましたが，インプラント治療後では主機能部位の多くは第一大臼歯に集中しており，咬合接触面積，咬合力ともに増加していることが明らかとなりました。本研究により，主機能部位は咀嚼機能の起点であり，欠損補綴治療においても考慮されるべき重要な要素であることを示唆する結果が得られたと考えております。今後も咬合，咀嚼運動に関する研究を継続し，研究成果を社会に還元できるよう邁進致す所存です。

最後に，本研究の機会を与えて下さった市川哲雄教授，共同研究者である西中英伸先生，数々の御助言，御指導をいただきました口腔顎顔面補綴学分野の諸先生方に厚く御礼申し上げます。



添田亮平 (東歯大)

Influence of chewing force on salivary stress markers as indicator of mental stress.

J Oral Rehabil 2012; 39(4): 261-269.

この度、平成24年度公益社団法人日本補綴歯科学会奨励論文賞を頂きまして、大変光栄に思います。

これまで、チューイングが精神的ストレスを緩和することは、唾液中のストレス指標(神経系、内分泌系および免疫系)を用いた研究により明らかとされてきました。しかし、チューイング時の運動要素が精神的ストレスの緩和に関与しているかについては、限られた報告しかありません。

そこで本研究では、チューイング力が精神的ストレスの緩和に及ぼす影響を唾液中のストレス指標(アマラーゼ活性、コルチゾール濃度およびs-IgA分泌率)を用いて検討しました。本研究により、チューイング力の違いが内分泌系のストレス指標であるコルチゾール濃度に影響を与えることを示し、強いチューイングは弱いチューイングと比較して精神的ストレスの緩和に効果的であることが明らかとなりました。これにより、ストレス緩和に関して適切な咀嚼指導をする際の指針とすることができました。今後もさらなる研究を進め、将来的には高齢者に対する指導に関しても明確にすべく努めていく所存です。

本研究の機会を与えて頂いた櫻井薫教授をはじめ、数多くのご指導を頂きました田坂彰規講師、研究遂行にあたりご助言を頂きました諸先生方に厚く御礼申し上げます。



高野智史 (東歯大)

Fatigue Strength of Ce-TZP/Al₂O₃ Nanocomposite with Different Surfaces.

J Dent Res 2012; 91(8): 800-804.

この度は、平成24年度社団法人日本補綴歯科学会奨励論文賞を受賞させて頂き大変光栄に存じます。また、ご選考頂きました諸先生方には改めて御礼申し上げます。

近年、メタルフリーレストレーションとしてジルコニアが固定性補綴装置や口腔インプラントに応用され

ております。本論文では、ジルコニアの中でも特に優れた機械的性質を示すとされるCe-TZP/Al₂O₃ナノ複合体(NANOZR)に着目し、インプラントフィクスチャーとして応用することを想定した表面処理がNANOZRの疲労強度に及ぼす影響について検討いたしました。一般的にジルコニアは表面処理により結晶構造の変化やマイクロクラックが発生し、機械的性質が変化する可能性があります。今回、NANOZRは表面処理により疲労強度に変化が認められたものの、ISO13356で定められた外科用インプラントにおけるジルコニアの疲労強度の基準である320MPaの2倍以上の疲労強度を有することが確認されました。今回の結果から、NANOZRのインプラントフィクスチャーとしての応用の可能性が広がり、また、今後のジルコニア研究の考察の一助となりえるような結果が得られたものと考えております。

最後に受賞の機会を頂くとともにご指導頂きました櫻井薫教授、そして論文完成まで支えてくださいました吉成正雄教授、田坂彰規講師に厚く御礼申し上げます。また、本研究を遂行するにあたり数多くの助言やご協力を頂きました先生方に深謝致します。



高橋利士 (大阪大)

Influence of palatal morphology on strain in maxillary complete dentures: a preliminary report.

Int J Prosthodont 2012; 25(6): 619-621.

この度は、平成24年度社団法人日本補綴歯科学会奨励論文賞に選出して頂き、大変光栄に存じます。また、関係の諸先生方には改めて御礼申し上げます。

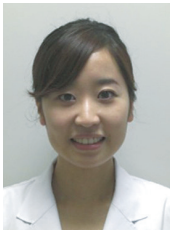
上顎全部床義歯の臨床における問題点の一つとして義歯床の破折、変形が報告されてきました。これらの問題を防ぐために多くの研究が行われてきたにもかかわらず、臨床においていまだに散見されているのが現状です。この原因として、今までの研究が実験条件を単純化した模型実験や有限要素法などであり、患者ごとに異なる口蓋や義歯の形態が考慮されていないためと考えました。そこで、口腔内にて義歯のひずみを計測することで、より義歯が機能した状態に近い結果を得ることができ、さらにその結果と患者の口蓋形態との関係を明らかにするにより、義歯作製前に口蓋形態からその患者の義歯の破折や変形のリスクを予測することができると考えました。今回の研究結果では、口

蓋の曲率半径が大きい患者ほど義歯正中部のひずみが大きくなり、このことから口蓋が平坦な患者は義歯の破折や変形の高リスクが高く、これらを防ぐために補強構造の埋入等の対策が必要である可能性が示唆されました。本研究が今後の上顎全部床義歯作製の際に少しでも多くの臨床の参考にしていただければ嬉しく存じ

ます。

最後になりましたが、本研究の機会を与えて頂き御指導頂きました前田芳信教授、権田知也講師および大阪大学大学院歯学研究科顎口腔機能再建学講座歯科補綴学第二教室の諸先生方に厚く御礼申し上げます。

第122回学術大会デンツプライ賞 受賞者の声



工藤桃子（東北大）

ジルコニアオールセラミッククラウンの臨床調査報告

この度は、日本補綴歯科学会第122回学術大会において優秀ポスター賞を受賞しましたことを大変光

榮に存じます。

本発表は、東北大学病院咬合修復科にて装着されたジルコニアオールセラミッククラウンの臨床経過、特にチッピング発生について後ろ向き調査を行いました。対象は、2004～2012年に当科の歯科医師6名が患者45名（女性37名）に対し、cercon® smart ceramicsを用いて院内技工室にて製作したジルコニアオールセラミッククラウン106個としました。装着からの平均追跡期間は4.6年でした。チッピングの生じ

た8例のうち5例はクラウン装着後1年以内であり、比較的早期に発生する傾向がみられました。またチッピング発生率は、歯種において有意に異なり、前歯部には見られず小臼歯と大臼歯のみに発生していました。

ジルコニアオールセラミック修復のチッピングは多く報告されており、この修復方法の問題点となっております。今後もクラウンのみならずブリッジも加え、咬合に関わる因子はもとより、習癖や食習慣などの因子についても調査、検討を進める予定です。

末筆ですが、今回親身なご指導を賜りました口腔システム補綴学分野の佐々木啓一教授、咬合機能再建学分野の依田正信先生、笠原紳講師、三浦賞子先生、そして多大なるご協力を頂きました諸先生方にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。



支部学術大会報告

●中国・四国支部学術大会

平成25年度公益社団法人日本補綴歯科学会中国・四国支部総会ならびに学術大会は台風の影響が心配されましたが、平成25年8月31日(土)、9月1日(日)の2日間、織田英正大会長のもと、高知市の総合あんしんセンターにおいて開催されました。初日は市民フォーラムをかわきりに、11演題の一般口演が行われ、活発な質疑応答が交わされました。夕方にはザクラウンパレス新阪急高知で懇親会が盛大に開催されました。2日目には特別講演2題、ポスター発表6演題、ランチョンセミナーと生涯学習公開セミナーを催し、169名の先生方に参加していただきました。

市民フォーラムでは「ずるくて賢い、あなたの口」という演題で大阪大学大学院歯学研究所高次脳口腔機能学講座の館村卓先生から摂食嚥下についてご講演をいただき、参加者から多くの質問があり、和やかに会が進行しました。

特別講演では「補綴歯科学における口腔顔面痛へのアプローチを通して見えるもの」と題して徳島大学大学院HBS研究部咬合管理学分野の松香芳三教授と「広島大学時代を振り返り、将来をみる」と題して奥羽大学長の赤川安正教授のご両名から、これからの歯科補綴の展望について示唆に満ちたお話をいただきました。

ランチョンセミナーでは中国・四国支部の織田展輔先生から「全部床義歯に与える咬合一フルバランスド・オクルージョン」、徳島大学大学院HBS研究部口腔顎顔面補綴学分野の永尾寛先生から「全部床義歯を安定化する一効果的な人工歯排列と咬合一リングライズド・オクルージョン」と題して臨床の勘どころの解説をしていただきました。

生涯学習公開セミナーでは「CAD/CAMを用いた歯冠修復—メタルフリーの補綴治療—」をテーマに、大

阪歯科大学歯科衛生士専門学校校長の末瀬一彦先生から「歯科用CAD/CAMシステムの現状と展望—アナログデンティストリーからデジタルデンティストリーへ」、広島大学病院口腔維持修復科咬合・義歯診療科の安部倉仁先生から「CAD/CAMによるメタルフリー修復と先進医療から保険診療導入に向けての取り組み」、和田精密歯研株式会社の樋口鎮央先生から「弊社におけるデジタル技工の変遷と現状」とそれぞれのお立場からこれからのCAD/CAMの方向性についてお話しいただき、活発な質疑応答が行われました。

2日間を通して、最新の研究発表から日常臨床に役立つ内容まで非常に内容の濃い学術大会で会場内は常に熱気にあふれていました。(徳島大 安陪 晋)



市民フォーラムを終えて左から河野先生、松山先生、館村先生、織田大会長



織田大会長(左)と二川支部長

●東北・北海道支部学術大会

平成25年10月12日(土)・13日(日)、京王プラザホテル札幌と北海道自治労会館(北海道札幌市)にて北海道医療大学越野寿大会長のもと、平成25年度公益社団法人日本補綴歯科学会東北・北海道支部総会・学術大会が開催されました。一般口演7題、ポスター発表11題、専門医申請ケースプレゼンテーション4題の発表があり、参加者は183名となりました。特別講演として、北海道医療大学の古市保志教授に「歯

周治療とEBM」と題するご講演をいただきました。また、シンポジウムとしては、「高齢者の歯科医療を考える—多職種連携と生活モデルを中心に—」とのテーマで、北海道保健福祉部の佐々木健先生、ケアプランセンター雪の華の渡邊紀子先生、北海道医療大学の鈴木英樹教授にご講演をいただきました。特別講演、シンポジウム共に、補綴学の領域を超えた幅広い内容の講演であったことから学会非会員の参加もあり、終始活発な質疑応答がなされました。

なお、7月6日（土）には、札幌歯科医師会館（北海道札幌市）において生涯学習公開セミナーを開催し、昭和大学の馬場一美教授、長崎大学の村田比呂司教授をお招きして、「パーシャルデンチャーの設計から予後まで」をテーマにご講演いただきました。さらに、9



シンポジウム「高齢者の歯科医療を考える－多職種連携と生活モデルを中心に－」

月9日（月）に、銀河の里あしよろ（北海道足寄郡足寄町）にて、北海道医療大学の豊下祥史先生を講師として、「噛むことと全身の健康について」と題する市民フォーラムを開催いたしました。（北医療大 會田英紀）



特別講演の古市保志先生

●東京支部学術大会

平成25年10月26日（土）、日本大学校友会 桜門会館において、石上友彦大会長、日本大学歯学部歯科補綴学第II講座の元、公益社団法人日本補綴歯科学会東京支部総会・第17回学術大会が開催されました。

参加者365名、演題数は一般口演20題、専門医申請ケースプレゼンテーション12題でした。

10月26日は東京に大型台風直撃の予報があり、開催が危ぶまれましたが、当日は台風が東の海上に逸れ、午後には晴れ間も見えました。悪天候予想の中、多くの参加者が見え、終日200名収容の会場に立ち見が出るほどの盛況になりました。また、専門医申請ケースプレゼンテーションの会場も活気のある質疑が行われ、多くの会員が見守っていました。特別講演は歯科技工士の瀬田寿樹先生に「近年の歯科業界における変化と今後の流れ－歯科技工士としての立場から歯科治療へのアプローチ」と題して、歯科医師と歯科技工士の医療連携を再確認する講演を頂きました。また、総会において第18回学術大会が昭和大学歯学部の尾関雅彦教授を大会長として開催されることが承認されました。学術大会終了後に同会館において懇親会が開催されましたが、会費が2000円であり、多くの若い会員の参加を得て会費以上の豪華な宴に会員の笑顔を頂きました。東京支部恒例の優秀学会発表賞も4題選出され、懇親会上で発表されました。最後まで和気あいあいした中、会を滞りなく終えることができましたことは、ひとえに東京支部の会員の皆様のおかげだと思っております。（日本大 月村直樹）



盛り上がっている学会会場



専門医ケースプレゼンテーションの真剣な質疑応答



大会運営（日本大学歯学部歯科補綴学第II講座）

イタリア・トリノ

International College of Prosthodontists 第15回学術大会

2013年9月18日から21日まで、International College of Prosthodontists (ICP) 第15回学術大会がイタリア・トリノにて開催されました。大会長は前田芳信教授(阪大歯)とMartin Gross先生(Tel Aviv大学)でした。

2006年の冬季オリンピックが開催されたことでも記憶に新しいトリノはイタリア第4の人口を有する都市で、ミラノに次ぐ第2の工業都市であり自動車工業の拠点です。学会会場となったLingotto Congress CenterはFIATの工場跡地の再開発により作られたものです。また、近代サルデーニャ王国の首都が置かれたこともあり、サヴォイア王家の王宮群は世界遺産に登録されています。

今回の学術大会は、39名の招待演者による基調講演、91題の口演発表および225題のポスター発表が行われました。学会の内容として、各種補綴装置の生存率や治療効果の最新疫学研究データの考察に基づいた治療オプションの選択や治療計画立案に関する有益な情報を提供する講演が多い印象でした。加えて、特に、審美性を重要視するイタリア人らしい、包括的アプローチによる審美補綴治療の発表も印象的でした。また、セッションスピーカーやモデレーターとして、本学会会員の活躍が目立った大会でした。本学会会員が多く参加し、日本からは8題の口演発表と82題のポスター発表が行われました。

ポスター発表の中から10演題の最優秀ポスター賞が表彰されましたが、その中から東歯大の太田 緑大学院生が最優秀ポスター賞を受賞しました。世界遺産に指定されている王宮にて行われたBanquet中に華々しく発表が行われましたので、本会の存在を十分に示すことになったと思います。今後の本学会との良好な関係作りにつながるものと期待されます。

山田将博(東歯大)

◆ JPS 会員の受賞

Poster Award 2013

Effect of chewing side on Autonomic Nervous Response

太田 緑(東歯大・有床義歯補綴学)



会場であるLingotto Congress Centerの口演会場



Banquetにて大会長の前田教授(左)とGross先生(右)から表彰を受ける太田大学院生



世界遺産に指定されているBanquet会場のStupinigi宮殿前にて指導医の櫻井 薫教授(左)とともに記念撮影をする太田大学院生(ともに東歯大)

Indian Prosthodontic Society 第41回学術大会

平成 25 年 11 月 13 日～17 日にインド北西部のクジャラート州にあるアフマダーバード（人口 635 万人，同国第 7 位の都市）にて開催された 41th Indian Prosthodontic Society Conference に参加させていただきました。

今回のテーマは“Independence to Interdependence”で，国内外からたくさんのスピーカーが参集し，多岐にわたる発表が行われていました。特に Kentucky 大学の Okeson 教授がプレコースと国際セッション合わせて計 5 時間の講演をされていたのが印象的でした。学会プログラムは講演（60 題以上），一般口演（歯科医師 125 題，学生 323 題）ポスター発表（学生 234 題），テーブルクリニック（98 題）等で構成されており，1,500 名以上の参加者を集め，大国を印象付ける非常にたくさんの発表が行われていました。また，会場は入り口からレッドカーペットが敷かれ，さながら映画祭のようであり，豪華な学会空間が演出されていました。

JPS からは日本大学松戸歯学部 of 川良美佐雄先生，明海大学の藤澤政紀先生と私の 3 名が招待され，以下のような講演を行いました。

Dr. Misao Kawara. Non-metal clasp denture in

Japan: Merits and demerits

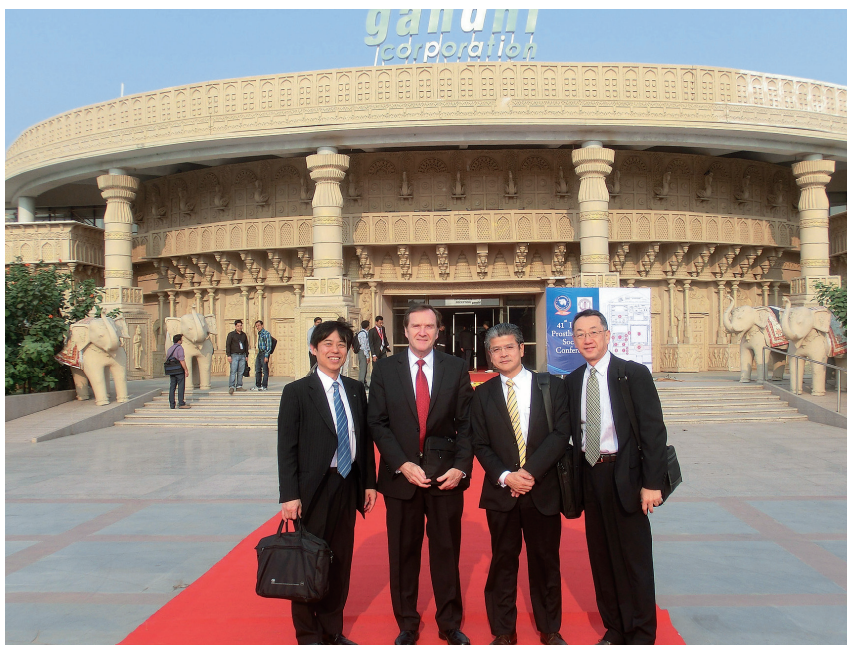
Dr. Masanori Fujisawa. Effect of masticatory muscle electromyogram biofeedback on bruxism regulation

Dr. Chikahiro Ohkubo. Delivery of a prosthetic appliance without any corrections

アフマダーバードは「インド独立の父」と呼ばれるガンディーの出生地であり，イスラム教徒が多く，たくさんのモスクが建立され，観光名所となっています。しかしながら，クジャラート州はインドでただひとつの禁酒州であり，ホテル内のレストランでもアルコールはサーブされません。学会期間中の食事もちろん，禁酒でしたが，唯一学会の Banquet では一区画だけ垂れ幕を張り巡らして治外法権区域を整備し，食前に一人 2 杯までのアルコールサービスを行っていました。

学会期間中はインド補綴学会員の暖かいホスピタリーと活気に触れ，非常に有意義な時間を過ごすことができました。関係の諸先生方に深くお礼を申し上げます。なお，第 42 回インド補綴学会は 2014 年 11 月 6 日～9 日に，インド北部の Chandigarh で開催される予定です。

大久保力廣（鶴見大）



学会会場に続くレッドカーペット上で（左から藤澤先生，Okeson 先生，大久保，川良先生）